以外はすべて英語の世界なのですから。 小学校で学習する算数の用語ぐらいなら、 教室では日本語しか教えていなくても、 子供たちはいつのまにか英語の言葉を知っていたりすることもめずらしくありません。一日のうち数時間を日本語の教室で過ごしても、 英語の刺激は、 十分にあるので、 心配ないのです。

ところが、 海外子女の場合は、 母国語である日本語で生活する環境は、 豊かとは言えません。 家庭での会話は、 ごく日常的な内容で終わってしまうことが多いので、 学習に必要な日本語を伸ばしていく環境は、 意識して作らない限り非常に乏しいものになります。 補習校に通うことは、 日本語の環境を高いレベルで維持していくために大きな助けになります。 お父さんやお母さんが日本で育った場合、 自分達は日本語を「自然に」身につけてきたので、 つい油断してしまうことがあるので、 気をつけていただきたいと思います。

3）の、教科の内容の理解と言う点では、いくつかの研究によって、イマージョン・プログラムの子供たちは普通に英語で学習する子供たちに劣らないという結果が報告されています。テストの結果は確かにそのとおりなのですが、なぜそうなっているかというところは、注意して考えないと正しく理解できません。例えば、私が教えていたバージニア州の日本語のプログラムでも、算数の成績は、イマージョンでないクラスに比べて劣ってはいないという結果が出ているのですが、その判定に使われたテストは、英語で行われているのです。つまり、評価されている力は、純粋に日本語の授業によってつけられたとは言い難いのです。子供たちは、たとえ授業を日本語で受けていたとしても、母国語である英語を使う方が力を出すことができます。もし、このテストを日本語でやるとしたら、成績はもっと悪くなるにちがいありません。また、高学年になると、州の教育過程で定められた内容のすべてを日本語で理解させることは実際は不可能なので、日本語で無理なところは英語で教えてしまうということもあります。プログラムの方針に忠実に従うなら許されないことなのですが、実際に教える立場にたって見れば、子供たちのために、日本語よりも教科の内容の理解を優先とするのはむしろ当然のことです。ですから、子供たちは、中学に進んで同じ教科を英語で授業を受けることになってもあまり戸惑わないですむのです。

海外子女の場合も、特に初めのうちは、英語で授業の内容を理解するのは大変です。しばらくしてなんとかついていけるようになり、本人が「授業が分かる」と言ったとしても、その理解の深さについては、過大に評価することはできません。もし、その時点で、日本語の力の方がものごとを深く考えることができるなら、英語で学習したことを日本語で復習することは、内容をよりよく理解することになります。それは、英語の力を伸ばすことにもつながります。どの言語を使ってでも、その学年相応の教科の内容を理解することは、考える力を伸ばし、これからの学習につなげていくために大切なことです。

中世フェア

一般的に、イマージョン・プログラムで、学年相応の教科の内容を外国語で理解させることは、実際問題として、非常に難しいと言えます。特に、アメリカで日本語をやる場合のように、母国語と外国語がまったくちがった言語であり、しかも教室の外で日常的にその言語にふれる機会が少ない場合は、無理な相談だと言っても過言ではありません。バージニア州のプログラムでは、中学校になると、イマージョン・プログラムの生徒も、教科の授業は普通に英語で授業を受け、日本語は外国語として学習を続けるシステムになっていますが、これは現実的な方法です。

それでは、イマージョン・プログラムは成果を上げていないかというとそうではありません。日本語のプログラムがある学校では、イマージョンの生徒だけでなく、全校の子どもたちが、日本の文化や生活・言語に関心が高く、日本に対する理解が深くなります。政治的な問題などに対しても、日本の立場を理解しようとする傾向が見られます。イマージョンの体験は、視野を広め、異文化を理解する力を育てているのです。

毎日、日本の言葉に接し、日本の文化の中で育ってきた先生と数時間を過ごすことが、このプログラムがなければ得られない貴重な体験であることは確かです。海外子女の子どもたちと家族の苦労も、それを前向きに引き受けていくことで、海外に来なければ得られなかった大きな宝をもたらしてくれるものになります。

編集長から一言

第一言語獲得の重要段階である小学校高学年の、アメリカでのイマージョン・クラスの報告です。

イマージョンや現地校での学習では、「言葉の習得」が強調され、時として「アカデミックな学力の向上」が見落とされます。子どもの発達段階に応じた対応の必要さと母語の重要さが、指摘されています。

イマージョンでは、言語習得の問題はあるものの「視野を広め、異文化を理解する力を育てている」との、佐々先生の経験からの言葉は貴重です。そして、海外子女にとっての、海外に来たから得られた「大きな宝」への期待は、海外で子育てに悩む保護者への、先生の応援の言葉です。